

1 東京都・大阪市中心卸売市場の需給動向(令和6年3月)

野菜振興部 調査情報部

【要約】

- 東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は10万4782トン、前年同月比94.1%、価格は1キログラム当たり306円、同115.0%となった。
- 大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は3万5329トン、前年同月比96.7%、価格は1キログラム当たり260円、同109.7%となった。
- 5月は、豊作で採り遅れるといった展開はなく、全般的に不作気味で、市場価格は高めに推移すると予想される。

(1) 気象概況

上旬は、日本付近に寒気が流れ込みやすく、旬平均気温は、北・東・西日本で低く、沖縄・奄美では平年並だった。降雪量は、北日本日本海側で多く、特に西高東低の気圧配置が強まった2日には西日本日本海側でも降雪があり、4日には北・東日本日本海側で大雪となった所もあった。8日には南岸低気圧の影響で関東地方の平野部でも降雪があった。また、5～6日にかけては南岸低気圧や前線の影響で、沖縄・奄美や東日本太平洋側では大雨となった所があった。このため、旬降水量は、北日本日本海側、東日本で多く、北日本太平洋側、西日本、沖縄・奄美では平年並だった。旬間日照時間は、西日本太平洋側で多く、東日本日本海側、沖縄・奄美では少なかった。北日本、東日本太平洋側、西日本日本海側では平年並だった。

中旬は、全国的に数日の周期で変化したが、高気圧に覆われて晴れた日が多かったため、旬間日照時間は、西日本日本海側と東日本太平洋側でかなり多く、東日本日本海側、西日本太平洋側と沖縄・奄美が多かった。北日本では平年並だった。旬降水量は、低気圧や前線の影響で、東日本で多く、北日本、西日本、沖縄・奄美では平年並だった。12日から13日にかけてと、18日から20日にかけては、発達した低気圧や寒気の影響で北・東・西日本では荒れた天気となった所があった。旬平均気温は、全国的に平

年並だった。

下旬は、全国的に数日の周期で変化した。高気圧に覆われやすかったため、旬間日照時間は、北日本と沖縄・奄美が多かったが、東日本と西日本で少なかった。29日には低気圧の影響で大雨となった所があったため、旬降水量は、北日本太平洋側で多く、北日本日本海側、沖縄・奄美では平年並だった。一方、東・西日本では低気圧や前線の影響を受けやすく、湿った空気が流れ込んで大雨となった所もあったため、東日本太平洋側と西日本でかなり多く、東日本日本海側が多かった。特に、西日本日本海側では旬降水量の平年比が268%となり、1946年の統計開始以降で3月下旬として1位の多雨となった。旬間日照時間は、期間のはじめは西高東低の気圧配置となり、寒気が流れ込みやすかった。その後は暖かい空気に覆われやすく、期間の中頃は沖縄・奄美から西日本を中心に、期間の終わりは全国的に、暖かい空気が流れ込んで気温が平年を大きく上回ったため、旬平均気温は、西日本でかなり高く、北・東日本と沖縄・奄美が高かった。

旬別の平均気温、降水量、日照時間は以下の通り(図1)。

図1 気象概況

	平均気温			降水量			日照時間			
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	
北日本				日本海側 太平洋側			日本海側 太平洋側			
東日本							日本海側 太平洋側			
西日本							日本海側 太平洋側			

資料:気象庁「3月の天候」

1 平年を上回る水準			
2 平年並み			
3 平年を下回る水準			

(2) 東京都中央卸売市場

東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、

入荷量は10万4782トン、前年同月比94.1%、価格は1キログラム当たり306円、同115.0%となった(表1)。

表1 東京都中央卸売市場の動向(3月速報)

品目	入荷量(t)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	104,782	94.1	87.7	306	115.0	122.9	279	304	332
だいこん	8,100	91.1	84.3	105	116.1	122.6	85	102	127
にんじん	5,680	91.8	84.3	201	128.8	134.3	172	208	218
はくさい	6,469	96.9	83.7	141	162.4	197.6	90	140	230
キャベツ類	15,208	87.5	82.0	112	131.1	136.2	93	105	134
ほうれんそう	1,336	82.5	85.8	542	129.7	135.7	493	581	553
ねぎ	3,874	94.4	96.9	342	148.6	117.9	357	327	341
レタス類	6,100	86.8	86.4	248	123.1	138.3	180	243	330
きゅうり	4,900	86.1	81.3	458	131.5	141.0	591	444	383
なす	1,810	81.1	80.2	465	125.3	113.3	456	457	481
トマト	4,593	87.6	79.5	467	108.8	116.0	432	444	519
ピーマン	1,919	92.8	95.3	800	114.7	124.9	827	798	784
さといも	370	79.1	82.7	387	134.6	127.9	402	390	369
ばれいしょ	7,499	114.5	103.6	152	101.5	87.7	133	152	171
たまねぎ	10,447	106.5	99.3	154	114.1	117.6	159	156	147

資料:東京青果物情報センター「青果物流通月報・旬報」

注1:平年比は過去5カ年平均との比較。

注2:豊洲、大田、豊島、淀橋、葛西、北足立、板橋、世田谷、多摩ニュータウンの9市場のデータである。

根菜類は、にんじんの価格が、千葉産が減少に向かった中旬以降に価格が上がり、前年を3割近く上回り、平年を3割以上上回った(図2)。

葉茎菜類は、レタスの価格が中旬以降下旬に向けて高騰し、高めに推移した前年を2割以上上回り、平年を4割近く上回った(図3)。

果菜類は、きゅうりの価格が下旬に向け落ち

着いたものの、不足感から、高めに推移した前年を3割以上上回り、平年を4割以上上回った(図4)。

土物類は、たまねぎの価格が堅調な推移となり、前年を1割以上上回り、平年を2割近く上回った(図5)。

なお、品目別の詳細については表2の通り。

図2 にんじんの入荷量と卸売価格の推移

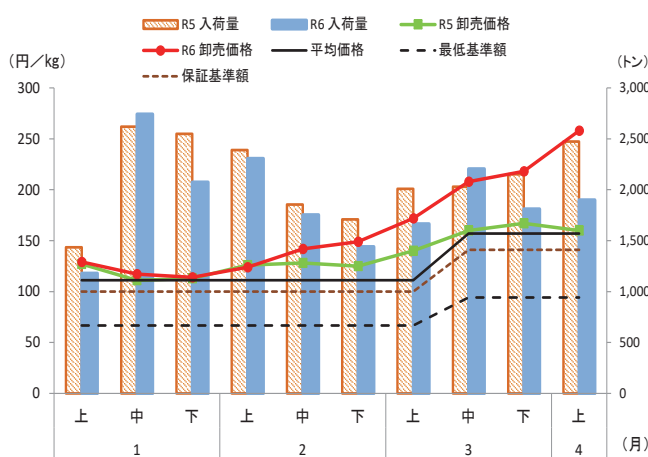


図3 レタスの入荷量と卸売価格の推移

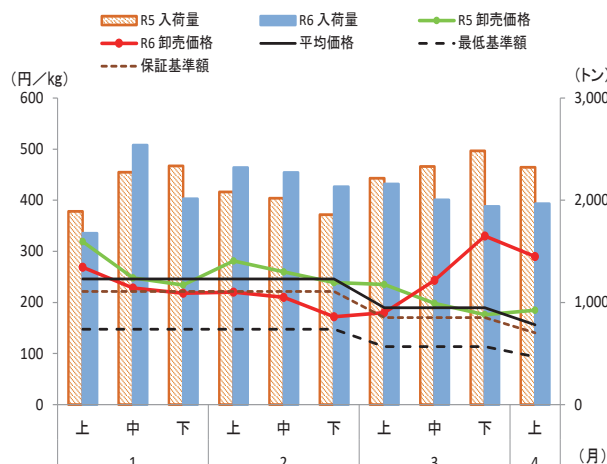


図4 きゅうりの入荷量と卸売価格の推移

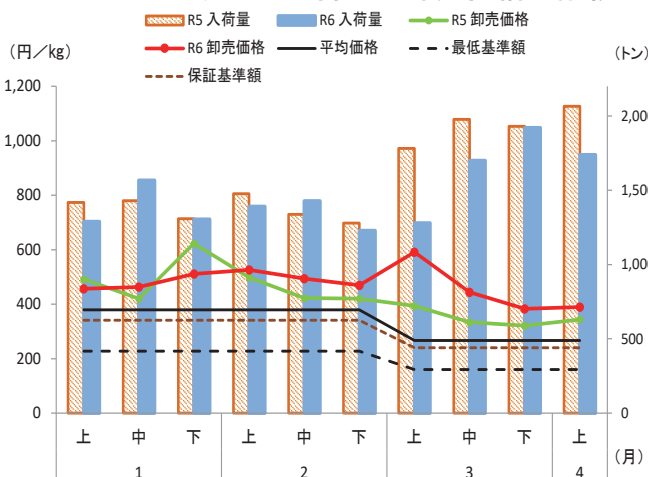
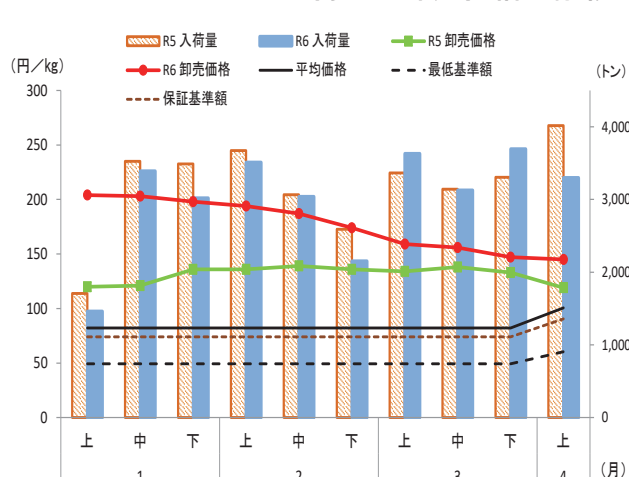


図5 たまねぎの入荷量と卸売価格の推移







資料：東京青果物情報センター「青果物流通旬報」

- ※1 卸売価格とは、東京都中央卸売市場の平均卸売価格で、平均価格、保証基準額および最低基準額とは、関東ブロックにおける価格である。
- ※2 平均価格とは、指定野菜価格安定対策事業（以下「事業」という）における、過去6カ年の卸売市場を平均した価格を基に物価指数等を加味した価格である。
- ※3 事業における価格差補給交付金は、平均販売価額（出荷された野菜の旬別およびブロック別の平均価額）を下回った場合に交付されるため、上記の各表で卸売価格が保証基準額を下回ったからといって、交付されるとは限らない。

表2 品目別入荷量・価格の動向（東京都中央卸売市場）

類別	品目	3月の入荷量・価格の動向
根菜類	 だいこん	千葉産、神奈川産中心の入荷となった。千葉産の作付面積は前年並みで、天候に恵まれ生育は順調でやや前進傾向となった。神奈川産の作付面積は前年並みで、栽培期間中の気温が高めに推移し日照にも恵まれたが、全体的に降水量が少なく、やや干ばつ傾向となった。前進傾向だった出荷は前年並みに戻っているが、切り上がりは早いとみられる。総入荷は少なかった前年を1割近く下回り、平年を1割以上下回った。 中旬以降、神奈川産の切り上がりにより価格が上がり、前年を1割以上上回り、平年を2割以上上回った。
	 にんじん	徳島産を中心に千葉産の入荷があった。徳島産の作付面積は前年をやや下回り、適度な降雨に恵まれ3月上中旬における生育はおおむね順調で、3月中に出荷されたものについての肥大は比較的良好であり、病虫害も少ない。千葉産の作付面積は前年並みで、暖冬の影響により収穫は順調に進み、前進傾向で残量は少ない。中国産の輸入が前年の3.5倍以上となっている。総入荷は少なかった前年をかなりの程度下回り、平年を1割以上下回った。 千葉産が減少に向かった中旬以降に価格が上がり、前年を3割近く上回り、平年を3割以上上回った。
葉茎菜類	 はくさい	茨城産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、暖冬の影響により生育が促進され大幅に前進した。秋冬作の切り上がり早く、春作も追いついていないことから、中旬以降端境が生じた。総入荷量は少なかった前年をやや下回り、平年を2割近く下回った。 端境が生じた中旬以降に価格が上がり、下旬に暴騰した結果、前年を6割以上上回り、平年の2倍近い価格となった。
	 キャベツ類	愛知産を中心に神奈川産、千葉産などの入荷があった。愛知産の作付面積は前年並みで、高めの気温推移から生育は順調で、10～14日程度前進し、大玉傾向となった。春系品種に収穫遅れによる裂球が目立ち、病害も散見された。神奈川産の作付面積は前年並みで、昨年内定植の作については温暖な気候により順調だった。その後定植したものは干ばつ傾向から活着が遅れたが、2月の降雨により回復傾向となった。千葉産の作付面積は前年並みで、天候に恵まれ生育は前進だった。総入荷量はやや少なかった前年を1割以上下回り、平年を2割近く下回った。 中旬以降価格が上がり、下旬に高騰し、前年を3割強上回り、平年を3割以上上回った。
	 ほうれんそう	茨城産、群馬産中心の入荷となった。茨城産の作付面積は前年をやや上回り、気温が高く生育は順調で、全体的に前進傾向となった。群馬産の作付面積は前年並みで、平坦地の露地作は前進しているため切り上がり早い。高冷地は一部低温障害が散見された。病害は少ないものの、虫害が散見された。総入荷量は前年を2割近く下回り、平年を1割以上下回った。 価格は、前進した影響により露地作が切り上がったことから、前年を3割弱上回り、平年を3割以上上回った。
	 ねぎ	千葉産を中心に、埼玉産、茨城産など関東産の秋冬作～春作の入荷があった。千葉産の作付面積は前年並みで、天候に恵まれ生育はやや前進傾向となり、肥大も順調で寒さによる葉の傷みも少なかった。埼玉産の作付面積は前年を下回り、収穫は順調に進んでいるが、一部病虫害が散見された。茨城産の作付面積は前年を下回り、好天に恵まれ生育は順調で、全体的に肥大も良好であった。総入荷量は前年、平年ともやや下回った。 価格は、予想したほどの増量がなかったことから堅調な動きが続き、安かった前年を5割近く上回り、平年を2割近く上回った。
	 レタス類	茨城産を中心に静岡産、香川産などの入荷があった。茨城産の作付面積は前年をやや下回り、温暖な気候と適度な降雨により生育は前進した。静岡産の作付面積は前年並みで、気温が高く降雨にも恵まれ、圃場間格差はあるものの、生育は順調で7～10日ほど前進したため中旬以降漸減した。香川産の作付面積は前年並みで、温暖な気候と降雨により生育が前進したため漸減傾向となった。総入荷量は前年、平年とも1割以上下回った。 価格は、中旬以降下旬に向けて高騰し、高めに推移した前年を2割以上上回り、平年を4割近く上回った。
果菜類	 きゅうり	群馬産、宮崎産を中心に千葉産、埼玉産などの入荷があった。群馬産の作付面積は前年並みで、草勢がやや弱く、一部圃場で軟弱徒長気味の株が散見されたが、生育はおおむね順調となった。宮崎産の作付けは前年並みで、天候に恵まれ生育はおおむね順調だが、一部草勢の低下が散見された。千葉産の作付面積は前年並みで、日照に恵まれ生育はおおむね順調であるが、一部圃場で病害が散見された。埼玉産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調だった。総入荷量は少なかった前年を1割以上下回り、平年を2割近く下回った。 価格は、下旬に向け落ち着いたものの、不足感から、高めに推移した前年を3割以上上回り、平年を4割以上上回った。
	 なす	高知産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、2月の気温高により生育はおおむね順調も、曇雨天の影響で前年並みとなり、その後月末から天候が回復したことで順調となった。虫害は少ないが、病害がやや多い。総入荷量は前年を2割近く下回り、平年を2割ほど下回った。 価格は、安めに推移した前年を2割以上上回り、平年を1割以上上回った。
	 トマト	熊本産、栃木産中心の入荷となった。熊本産の作付面積は前年並みで、天候に恵まれ生育はおおむね順調となった。病害の発生も前年並みであり、大きな影響は見られない。栃木産の作付面積は前年並みで、越冬作の生育はおおむね順調であったが、成り疲れの影響により圃場により草勢の弱い株が散見された。Mサイズ中心の出荷となっている。促成型の生育は順調だが、3月上旬の降雪や雨の影響により病害の発生がやや多い。総入荷量は少なめに推移した前年を1割以上下回り、平年を2割強下回った。 価格は、数量の落ち着きと気温の上昇による需要促進から下旬に向けて上がり、やや高めに推移した前年を1割近く上回り、平年を1割以上上回った。

	 ピーマン	<p>茨城産、宮崎産中心等の入荷となった。茨城産の作付面積は前年並みで、温暖な気候に恵まれて生育は順調だが、病害の発生が散見された。宮崎産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調だが、一部花落ちが散見された。総入荷量は前年をかなりの程度下回り、平年をやや下回った。</p> <p>価格は、中旬以降徐々に落ち着きを見せたものの、やや高めに推移した前年を1割以上上回り、平年を2割以上上回った。</p>
土物類	 さといも	<p>埼玉産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、収穫は終了している。夏場の高温・干ばつの影響により年明け以降の残量は少なく、産地によっては種芋の確保に苦慮している状況となった。中国産の輸入については前年の2倍以上となっている。総入荷量は前年を2割強下回り、平年を2割近く下回った。</p> <p>価格は、植え付け作業のずれ込みから、一時的に出荷が増える期間が短く、相場が崩れる期間が短かった。下旬に少し落ちていたものの、前年を3割以上上回り、平年を3割近く上回った。</p>
	 ばれいしょ	<p>北海道産、鹿児島産中心の入荷となった。北海道産の作付面積は前年並みで、収穫は終了している。引き続き発芽が懸念されるため、選果効率が低下している。鹿児島産の作付面積は前年並みで、植え付け時期の高温により出芽が早く、その後の暖冬傾向により生育も早かった。総入荷量は少なかつた前年を1割以上上回り、平年をやや上回った。</p> <p>価格は、過去3年高めの推移となったところ、前年をわずかに上回り、平年を1割以上下回った。</p>
	 たまねぎ	<p>北海道産を中心に静岡産、佐賀産の入荷となった。北海道産の作付面積は前年並みで、収穫は終了している。夏場の高温の影響により作柄が悪く、小玉傾向となった。貯蔵量も少ない。静岡産の作付面積は前年並みで、定植後の温暖な気候と適度な降雨に恵まれ、生育は順調で大玉傾向となった。前進出荷のため、減少ペースはやや早い。佐賀産の作付面積は前年並みで、温暖な気候と適度な降雨により病害が一部散見されるものの、生育は順調となった。中国産の輸入は前年の1.8倍となった。総入荷量は少なかつた前年をかなりの程度上回り、平年をわずかに下回った。</p> <p>価格は堅調な推移となり、前年を1割以上上回り、平年を2割近く上回った。</p>

(執筆者：東京シティ青果株式会社 平田 実)

(3) 大阪市中央卸売市場

大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は3万5329トン、前年同月比96.7%、

価格は1キログラム当たり260円、同109.7%となった(表3)。

品目別の詳細については表4の通り。

表3 大阪市中央卸売市場の動向(3月速報)

品目	入荷量(t)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	35,329	96.7	94.1	260	109.7	115.6	236	257	286
だいこん	2,469	100.7	96.4	93	112.0	118.2	77	91	109
にんじん	2,299	105.8	99.8	194	132.9	137.4	173	192	218
はくさい	3,430	97.9	98.5	148	164.4	191.9	108	137	206
キャベツ類	4,893	83.7	88.1	96	126.3	134.0	78	87	121
ほうれんそう	378	84.0	74.9	561	125.8	141.3	490	614	570
ねぎ	832	94.2	97.5	429	130.4	126.8	440	400	445
レタス類	1,057	81.4	79.5	240	115.9	135.5	169	234	325
きゅうり	1,092	79.3	81.4	437	131.2	138.2	576	424	364
なす	710	88.1	104.0	433	119.9	113.9	432	427	438
トマト	1,240	86.7	83.3	435	103.3	113.5	411	413	478
ピーマン	418	92.3	96.8	800	113.6	127.7	827	789	790
さといも	62	82.2	82.7	388	148.7	136.2	386	382	398
ばれいしょ	3,514	117.5	112.9	149	99.3	83.3	121	154	164
たまねぎ	5,314	102.5	101.3	137	110.5	111.8	142	136	133

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年比は過去5カ年平均との比較。

注2：大阪本場および大阪東部市場のデータである。

表4 品目別入荷量・価格の動向（大阪市中央卸売市場）

類別	品目	3月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん 	<p>鹿児島産を中心として、長崎産、徳島産、香川産などの入荷があった。九州の各産地は降雨や曇天などの天候不順の影響により産地出荷量が少なかった。他産地も日照量が少なく、気温も低かったことにより肥大が悪く、重量のある太物が少なかったため入荷量は伸び悩んだ。全体でも中旬の入荷量が少なく、下旬に回復の兆しが見られたが、月間では前年をわずかに上回り、平年をやや下回った。</p> <p>全体的な不足感と太物が少なかったことにより価格は高値推移となり、旬を追うごとに高騰を続けた。月間では前年をかなり大きく上回り、平年を大幅に上回った。</p>
	にんじん 	<p>鹿児島産の残量入荷と後続の徳島産の入荷が主力となった。鹿児島産は前月までの暖冬の影響による前進気味の出荷に加え、降雨続きで産地出荷量が減少し、旬を追うごとに入荷量が減少し、月間でも前年をかなり下回った。徳島産も天候が悪く、気温も低かったことから肥大が悪く、Mサイズ中心の入荷となり旬を追うごとに増加する中でも伸び悩んだ。月間では前年をやや上回り、平年並みとなった。</p> <p>品不足感と中旬から下旬に端境が生じたことから、価格は旬を追うごとに高騰を続けた。月間では前年、平年とも3割以上上回った。</p>
葉茎菜類	はくさい 	<p>長崎産を中心として、兵庫産や愛知産の残量入荷、後続の茨城産の入荷などがあつた。前月の気温高により九州産地は前進し、中旬ごろをピークに減少した。長崎産や熊本産などは前年をかなり下回り、福岡産は前年の半量以下となった。後続の茨城産は3月に入ってからの天候不順や急な低温の影響により出遅れ、上中旬は入荷量が極端に少なく、下旬から増え始めたが端境が生じた。月間全体では前年、平年ともわずかに下回った。</p> <p>野菜全体の品薄感の中、気温が低かったこともあり、量販店で特売需要が多く引き合いが高まったことから、価格は旬を追うごとに高騰した。月間では前年の1.5倍以上、平年の2倍近い価格となった。</p>
	キャベツ類 	<p>春キャベツは愛知産を中心に和歌山産や兵庫産が主体となり、寒玉キャベツは愛知産が中心となり大阪産の入荷などがあつた。春キャベツは前月までの気温高により前進出荷となったが、3月に入ってからの降雨と急な気温低下の影響により生育が鈍化し、入荷量は伸び悩んだ。寒玉キャベツも前月から上旬までは生育良好であったが、中旬以降の天候不順と冷え込みにより入荷量は増えず少ないまま横ばいとなった。月間全体では前年を大幅に下回り、平年をかなり大きく下回った。</p> <p>野菜全体の品薄感と量販店での特売などもあり、引き合いは高く価格は旬を追うごとに高騰を続けた。月間では前年を2割以上上回り、平年を3割以上上回った。</p>
	ほうれんそう 	<p>この時期の主力は徳島産と福岡産であるが、九州の降雨続きと気温が低かったことにより生育が悪く、産地出荷量が少ない状況が続き、月間では前年の半量以下となった。徳島産は旬を追うごとに増加し、少なかった前年を大幅に上回ったが、月間全体では前年を大幅に下回り、平年を2割以上上回った。</p> <p>絶対量不足から価格は高騰を続け、月間では前年を2割以上上回り、平年を4割以上上回った。</p>
	ねぎ（白ねぎ） 	<p>群馬産と鳥取産を主力に、静岡産や埼玉産の入荷などもあつた。各産地とも比較的安定した出荷を続け、月間全体では前年並みとなった。</p> <p>3月に入ってからの気温低下の影響により引き合いが強まり、価格は高値推移となった。月間では前年を大幅に上回った。</p>
	ねぎ（青ねぎ） 	<p>徳島産を中心に高知産や近隣の大阪産、奈良産などの入荷があつた。各産地とも降雨や曇天続きで気温も低く、生育不良となり産地出荷量が少ない状況が続いた。全旬とも入荷量は伸び悩み、月間全体では前年をやや下回った。</p> <p>量販店、業務用共に引き合いが強く、発注量も多かったため高値で推移した。月間では前年を上回った。</p>
レタス類 	<p>玉レタスは、ラップ物は兵庫産、徳島産、香川産が主体となり、裸物は長崎産が主体となった。前月までの気温高の影響により前進出荷となり、3月に入ってからの気温が下がり、降雨や曇天の日も多かったことにより生育が進まず、端境気味となって各産地とも入荷量が少ない状況が続いた。サニーレタスは福岡産が中心となり、玉レタス同様に前月までの暖冬による前進出荷と、3月に入ってからの低温による生育不良から端境気味となり入荷量が少ない状況が続いた。リーフレタスは福岡産を中心に、香川産や徳島産などの入荷もあつた。福岡産は玉レタスやサニーレタス同様、前月までの暖冬と3月の低温の影響により入荷量は伸び悩んだが、加工筋からの発注が多かったことから他産地の入荷が増え、全体としては前年をやや上回った。レタス類全体では前年、平年とも大幅に下回った。</p> <p>玉レタスは絶対量不足に加え、量販店での特売の要請などもあり、価格は旬を追うごとに高騰した。サニーレタスも玉レタス同様、旬を追うごとに高騰した。リーフレタスはレタス全体の高値の影響もあり、前年をやや上回る推移となった。レタス類全体では、前年をかなり大きく上回り、平年を3割以上上回った。</p>	

果菜類	きゅうり 	<p>宮崎産を中心に高知産、徳島産の入荷があった。各産地とも降雨や曇天の日が多く、日照量が少なかった上、2月の気温高から一転して気温が低下したため生育が不安定となり、産地出荷量は伸び悩んだ。旬を追うごとに微増傾向で下旬には回復の兆しが見られたが、月間では前年、平年とも大幅に下回った。</p> <p>不足感から価格は高騰し、入荷量の微増に伴って旬を追うごとに下落傾向となる中でも、月間を通して高値推移となり、前年、平年とも3割以上上回った。</p>
	なす 	<p>千両系は高知産を中心に大阪産や岡山産、長なすは福岡産と熊本産が主体となる入荷であった。各産地とも2月の気温高から一転して気温が低下し、降雨や曇天が多く日照量も不足したことから、着果不良が増えて産地出荷量は少ない状況が続いた。千両系、長なすともに旬を追うごとに微増傾向とはいえ入荷量は少なく、月間全体では前年をかなり大きく下回り、平年をやや上回った。</p> <p>関東向けにMサイズの出荷が増えたことから不足感が生まれ、絶対量不足から価格は高騰した。月間では前年を大幅に上回り、平年をかなり大きく上回った。</p>
	トマト 	<p>熊本産と愛知産が主体となり、福岡産の入荷もあった。各産地とも2月の気温高により前進した後、3月に入ってから気温低下と日照不足から着色が進まず、産地出荷量は少ない状況が続いた。入荷量は不安定で少なく、月間全体では前年をかなり大きく下回り、平年を大幅に下回った。</p> <p>価格は不足感から旬を追うごとに上伸を続け、高値推移となった。月間では高かった前年をやや上回り、平年をかなり大きく上回った。</p>
	ピーマン 	<p>宮崎産を中心に高知産や鹿児島産などの入荷があった。3月に入ってから気温低下の影響は多少ありながらも、比較的安定した出荷を続け、全旬を通じて増減は少なかった。月間全体では前年をかなりの程度下回り、平年をやや下回った。</p> <p>価格は、量販店での引き合いと野菜全体の高値の影響により高値推移となった。月間では前年をかなり大きく上回り、平年を3割近く上回った。</p>
土物類	さといも 	<p>国産は愛媛産が中心となる入荷であった。産地出荷量が少ない中でも全旬とも増減はなく安定した入荷であったが、月間では前年を大幅に下回った。輸入の中国産の入荷もあり、ほとんど入荷がなかった前年の2倍以上となった。月間全体では前年、平年とも大幅に下回った。</p> <p>価格は、不足感に加えて、輸入の中国産の現地価格が高く輸入コストも高騰していることから、全体としても高値となった。また気温が低い日が多かったことから引き合いが強まり、全旬とも高値安定で推移した。月間では前年を4割以上上回り、平年を3割以上上回った。</p>
	ばれいしょ 	<p>丸芋は鹿児島産を中心として北海道産の残量入荷もあった。鹿児島産は降雨の日が多く、上旬から中旬にかけて伸びなかったが、下旬には回復して増加し、月間では前年を大きく上回った。北海道産は終盤の中でも潤沢な入荷が続き、全体でも前年を大幅に上回った。「メークイン」は北海道産の残量が中心となる入荷で、終盤でありながらも潤沢な入荷を続け、月間では前年を上回った。ばれいしょ全体では前年を大幅に上回り、平年をかなり大きく上回った。</p> <p>価格は、品質低下などで安値が続いていた終盤の北海道産が減り、新物の鹿児島産が増えていく中、入荷増でも旬を追うごとに上伸を続けた。月間では前年をわずかに下回り、平年を大幅に下回った。</p>
	たまねぎ 	<p>北海道産の残量と長崎産の新物が主体となる入荷であった。北海道産は終盤を迎え3月でほぼ終了となった。長崎産は降雨の日が多く、収穫作業が進まないため産地出荷量が少なく、入荷量は旬を追うごとに減少傾向となり、月間では前年を大幅に下回った。国産の品薄感が続く中で輸入の中国産が増え、前年の2倍以上となった。兵庫産や大阪産の新物の入荷もあったが、降雨の日が多く入荷は安定しなかった。月間全体では前年、平年ともわずかに上回った。</p> <p>価格は、北海道産の不作の影響により長らく続いていた高値の影響が残り、輸入の中国産の価格も国産と変わらない状況の中、入荷増に伴って旬を追うごとにわずかに下落傾向ではあったが、月間では前年をかなりの程度上回り、平年をかなり大きく上回った。</p>

(執筆者：東果大阪株式会社 新開 茂樹)

(4) 首都圏の需要を中心とした5月の見通し

春野菜への切り替わりの時期である3月は、低温傾向と曇雨天が続いたため端境が生じた。3月末にははくさいの価格が暴騰した。後続のはくさい産地は「4月には急増して価格は落ち着く」との見解である。4月の気温が高めに推移すれば、野菜全般の出荷が出揃って価格は落ち着くと予想される。3～4月にかけては雨がちではあるが晴れの日も周期的に訪れ、5～6月の果菜類の不作の心配はないと予想される。5月後半からスタートする高原物は、作業の遅れにより、6月の出荷時期に量のばらつきが予想される。

春野菜全般としては、豊作で採り遅れといった展開はなく、不作気味で市場価格は高めに推移すると予想される。

根菜類



だいこんは、千葉産（鎌ヶ谷）は4月に入ってから直ぐに出荷が始まり、この上中旬をピークに5月上旬で切り上がると予想される。生産者の高齢化による作付けの減少もあり、出荷は前年をやや下回ると予想している。千葉産（ちばみどり）は11月下旬の干ばつの影響により、現状は横縞症（皮目に沿ってへこみ褐色の筋が発生する）が見られる。出荷量は雨が続いた影響により少ないが、4月に入って回復し、5月10日過ぎには減ってくると予想している。平年作であるが、4～5月に前進して少なくなった前年を上回ると予想される。青森産は、3月に積雪した影響により、例年より5～7日程度遅れて5月20日過ぎから出荷が始まり、ピークは6月に入ってからと予想される。Lサイズが中心になることを想定して収穫するが、次に多くなるサイズが2LかMかの予想は難しい。

にんじんは、徳島産は3月下旬時点では降雨が続き、出荷は減少している。圃場には充分あるため、天候が回復すれば再び増えると予想される。全体の作柄は平年作とみている。出荷のピークは4月下旬から5月上旬で、10日過ぎには減って6月10日過ぎまで出荷できると予想される。品種は「彩誉」中心で、後半には

「紅ひなた」が多くなると予想される。5月には肥大してLサイズが多くなると予想される。千葉産の春にんじんは5月の連休明けから出荷が始まる予定で、現時点では生育順調で、6月いっぱいぐらいまでと予想される。



葉茎菜類

キャベツは、千葉産の出荷の現状は、端境を迎えて少なくなっており、例年の70～80%となっている。2月の寒暖差や、雨が多かったことにより、全般的に小玉傾向となったことや、品質が悪く出荷できない物があったためである。今後天気が回復すれば、5月に入り例年並みに回復すると予想している。愛知産の春キャベツは、4月10日以降減り、5月上旬までの出荷と予想される。冬系品種の新キャベツは、5月初め頃に一回目のピークがきて、その後5月10日～15日頃に二回目のピークがくると予想される。いずれも生育は順調で、例年並みの出荷を予想している。神奈川産の金系201号キャベツは、例年より大幅に早く2月から始まったが、3月の冷え込みから失速し、現状は例年の80%ペースの出荷になっている。圃場には十分あるため、4～5月には回復すると予想される。5月中旬には例年よりやや早めに切り上がり、5月としては前年を下回る出荷と予想される。茨城産は例年同様5月10日前後からの出荷と予想される。ピークは5月下旬から6月いっぱい、作付けは前年と同様で、品種は寒玉系である。

はくさいは、茨城産は2月下旬から冷え込みが長く続き、春はくさいの生育は芳しくなかった。3月の最終週も雨の日が多く収穫作業ができなかった。さらに3月下旬の秋冬物も全国的に早く切り上がって出回り不足となり、出荷量は例年の3分の1程度で、価格が暴騰した。4月に入り回復し、5月は問題なく例年並みに出荷でき、出荷は6月上旬までと予想される。長野産の現状は定植も生育も約一週間遅れている。出荷の始まりは5月中旬後半と予想している。作付けは例年と同様であり、圃地は小諸市の標高700～800メートル地帯である。

ほうれんそうは、群馬産は露地物で、現状は寒さにより生育が止まっている。近年のこの時期は干ばつ気味となるが、今年は雨が多い。4月20日過ぎに増えてきて、5月に入り急増すると予想している。現在の播種作業の状況を踏まえると、中旬頃の出荷が減る展開も予想される。農家数は変わらず、天候が回復すれば例年並みの出荷を予想している。岩手産は3月前半は例年より寒かったが出荷には影響はない。当面のピークは6月で、5月は増えながら推移すると予想される。しばらくは東北各県への出荷が多いが、5月には東京への出荷が増えると予想される。作付けの減少から、5月としては前年をやや下回ると予想している。群馬産の現状は周年栽培の出荷のみとなっており、ほぼ例年通りの出荷で、4～5月の数量は例年通りと予想される。

ねぎは、茨城産は、4月下旬から本格化する夏ねぎの生育が順調である。トンネルを外した直後に強風に遭遇し、一部で葉の損傷が見られたが、大きな影響は受けていない。当初前進すると予想したがそれ程でもなく、7月まで平年並みに潤沢な出荷を維持できると予想される。千葉産の現状は天候の影響もなく、例年並みの出荷となっている。4～5月は夏ねぎのピークとなり、2Lサイズ中心に前年並みかやや少なめで、6月に入り減少すると予想される。

レタスは、茨城産の岩井地区は2月の暖冬により7～10日前進し、前年の140%程度の出荷となった。現状はこの影響で端境を迎えている。さらにトンネルの次のべた掛け物や露地物の生育が寒の戻りで停滞している。これらは4月10日頃からピークとなるが、切り上がりは早く5月は少なくなると予想される。結城地区は3月は小玉傾向で箱数が伸びず、作付面積の減少もあり、例年を下回った。4月も例年のような大きなピークにならず、ほぼ5月いっぱい一定のペースでの出荷が続くと予想している。長崎産は天候不順により現状の出荷は例年の70%ペースとなっており、腐敗も発生している。4月に入って回復を期待しているが、5月には減り、例年より早く下旬には切り上がると予想される。群馬産は例年より一週間程度の遅れとなっているが、4月中旬から始まり、当面のピークは5月の連休明け頃と予想される。現

状はマルチが張れず、この影響により5月下旬にやや少なくなる可能性がある。6月中旬から再び増えるといった増減の激しい展開も予想される。長野産は今年3月の積雪が多く、出荷開始は10日程度遅れて4月末頃を予想している。5月中旬にピークとなり、5月としては前年並みを予想している。

果菜類



きゅうりは、埼玉産の現状は天候不順の影響により少なめの出荷となっており、寒暖差が大きいことも影響している。5月の連休明け頃には増えてピークとなり、その後減りながら推移し、7月初め頃には切り上がると予想される。5月は前年並みの出荷を予想している。宮城産の現状は出荷が始まっているが、例年並みのペースとなっており、ピークは連休を挟む4月後半から5月初め頃を予想している。その後もピークは巡ってきて、出荷は7月上旬までと予想される。作付けは前年の90%程度である。群馬産の生育は順調で、前年並みに6月いっぱいが出荷のピークとなる見込みである。

なすは、高知産は2月下旬から天気がぐずついた影響により3月は少なくなったが、4月に回復すると予想している。例年は4～5月がピークとなり、6月に入り徐々に切り上がるが、梅雨が始まる時期によっては、このパターンが崩れることも予想される。福岡産の長なすは、曇天が多く続いているが木の状態は悪くない。4月中旬から5月にかけてがピークで、5月の連休明けには減り、切り上がるのは7月中旬と予想される。量的には平年並みを予想している。

トマトは、福岡産の越冬物は5月がピークで、6月中旬頃に切り上がると予想される。3月の多雨により病気が見られ、4～5月の出荷は例年を下回ると予想している。品種は「桃太郎系」で、MSサイズ中心の見込みである。佐賀産の「光樹とまと」は2～3月の天候不順により一時落ち込むことはあったが、現状は順調である。当面のピークは4～5月で、6月中旬から徐々に切り上がると予想される。品種は「サンロード」で、中心サイズはMである。熊本産の現状は天候による減少などはない。ピークは4月下

旬以降で、6月中旬から減り始めて6月いっぱいの出荷と予想している。ミニトマトは、熊本産の現状は天候の影響はなく、順調に前年並みに出荷されている。出荷のピークは4月下旬から5月下旬の1カ月間で、6月中旬以降に減ってくると予想している。作付けは若干減少している。中心品種は「CF千果」「小鈴」である。

ピーマンは、茨城産の春ピーマンは4月下旬から6月中旬までがピークと予想される。3月は曇天により花落ちするなど、出荷が少なかった。4月に入り気温が上がれば、5月まで前年並みに回復すると予想される。加温物も引き続き入荷するが、全体では前年並みを予想している。宮崎産の現状の冬春物は、3月の好天の影響もあり、ピークとなっている。5月の出荷は例年並みで、最終の出荷は6月中旬と予想している。鹿児島産の冬春ピーマンは現在後半に入っており、病気が見られるなど作柄は例年より悪い。4月は収量が多くピークとなり、5月はらっきょうの作業に忙しいため少なくなって、月末には切り上がると予想される。

土物類



ばれいしょは、静岡産の「三方ヶ原男爵」は5月中旬から出荷が始まるが、3月の低温の影響により例年より少し遅れると予想している。出荷のピークは6月上旬で、7月いっぱいまでと予想され、例年よりやや小ぶりの可能性もある。長崎産の春ばれいしょの走り物は例年より早めの3月末頃から始まった。平年と同様、東京市場への出荷は4月中下旬からで、ピークは5月と予想される。作柄は平年作で、生育に悪影響を与えるものは見当たらない。

たまねぎは、佐賀産の現状は極早生の出荷となっており、平年作である。早生の収穫は4月10日から始まり、出荷が始まるのはその7日～10日後である。4月下旬が全体のピークとなると予想される。中生の収穫は5月末頃から始まる。3月は雨が多かったが大きさは前年並であった。兵庫産の現状は極早生の出荷となっているが、例年より多い。早生が始まるのは4月20日過ぎで、5月の連休頃に出荷のピークを迎えると予想される。作付けが増えているこ

ともあり、5月は前年を上回る出荷が予想される。大きさはLサイズ中心で前年並みである。香川産は例年よりやや遅めの5月の連休明けからの出荷となると予想される。ピークは5～6月で、作付けは例年と変わらない。現状雨が多く、病気の発生が懸念される。千葉産は例年より早く収穫が始まっており、市場出荷は4月15日～20日の間に始まり、ピークは4月末から5月上旬と予想している。今のところ病気の発生もなく生育は順調で、肥大良好である。



その他

ブロッコリーは、埼玉産の春ブロッコリーは出荷が10日以上遅れており、4月に気温が上がれば急増が予想される。当初から出荷期間は1か月程度であり、5月15日過ぎには急減し終盤を迎えると予想される。愛知産の春ブロッコリーは4月中下旬がピークで、特別天候不順の影響はない。5月も出荷されるが、作付けが減少しているため、6月はかなり少ないと予想される。品種は「恵麟」である。

カリフラワーは、茨城産は、3月中旬のハウス物から始まり、4月にトンネル物も始まり、4月下旬から5月いっぱいピークと予想される。天候不順ではあるが、生育は順調で今後増えると予想される。生産者が増えており、前年を上回る出荷を予想している。

アスパラガスは、福島産はやや出遅れて4月6日頃から出荷が始まり、ハウス物は一定ペースで出荷されピークはないと予想される。主力の露地物は4月下旬から始まり、一回目のピークは5月の連休明け頃で、5月末頃に一旦切り上がると予想される。昨年の夏の高温により、株の出来が良くない可能性が大きい。北海道産のハウス物は4月5日から始まり、これは道内のみの出荷となる。5月20日から出荷が始まる露地物から東京市場に出回る。ピークは5月末頃から6月と予想される。前年の養成時期の天候が良くなかったことにより株の出来が悪く、やや不作年となる可能性がある。

かぶは、千葉産は、暖冬の影響により現状までは例年より多く出荷された。4月までは順調に多いが、5月にはにんじんの出荷が始まるため、量は減ると予想される。5月としては前年並みかやや多いと予想している。青森産はほぼ例年と同様、5月20日頃から始まると予想され、作付けも前年並みである。6月中旬からピークとなるが、7月以降も出荷は続く見込みである。品種は「玉里」^{たまもと}「なつばな」である。

かぼちゃは、鹿児島産の出荷の始まりは5月初めからで、高齢化の影響により作付けは前年の90%と減っている。出荷のピークは5月から6月中旬までと予想される。品種は「えびす」「栗五郎」であり、中心は5玉6玉サイズである。

スイートコーンは、宮崎産のハウス物は4月上旬から始まり、トンネル物も5月の連休明けから始まり、ピークは5月末頃で、6月上旬までの出荷と予想される。品種は「ゴールドラッシュ」で、作付けは微減である。

えだまめは、千葉産のハウス物は4月に入ってから始まるが、3月の天候不順によりやや遅れて20日頃からと予想される。露地物は例年と同じであれば中旬からと予想される。作付けはほぼ前年並みで、5月の出荷は前年並みを予想している。静岡産は周年産地のため出荷は途切れることはなく、現状は増えてきている。露地物の播種も始まり、この分は6月上中旬に出荷されると予想される。

群馬産は5月中旬から始まり、ピークは6月の父の日から7月20日頃と予想される。作付けは前年並みである。

そらまめは、愛媛産はやや遅めの4月20日から出荷開始の予想である。出荷のピークは5月の連休明け頃で、5月24・25日頃には切り上がると予想される。作柄は問題なく順調であるが、作付けは若干減少している。宮城産の出荷は例年より前進傾向で5月下旬から始まり、6月上旬をピークに、6月下旬には切り上がると予想される。作付けは前年より若干減少している。

スナップえんどうは、福島産は5月20日過ぎから例年並みに始まると予想される。今年は降雪が少なく雪解けは早かったが、芽が出た後に積雪するなどの影響により欠株となり、例年の半作程度と予想している。きぬさやえんどうは4月から始まり5月中旬までだが、やはり不作と予想している。

らっきょうは、鳥取産は例年と同じく5月20日頃から始まり、ピークは5月末から6月10日過ぎと予想される。泥付き物は6月15日頃までだが、洗い物は20日頃までで、現状は平年作を予想している。鹿児島産は例年通り4月下旬から始まり、直ぐにピークを迎え、6月上旬に切り上がると予想される。今年度は平年作で、豊作であった前年の90%程度と予想している。作付けは前年並みである。

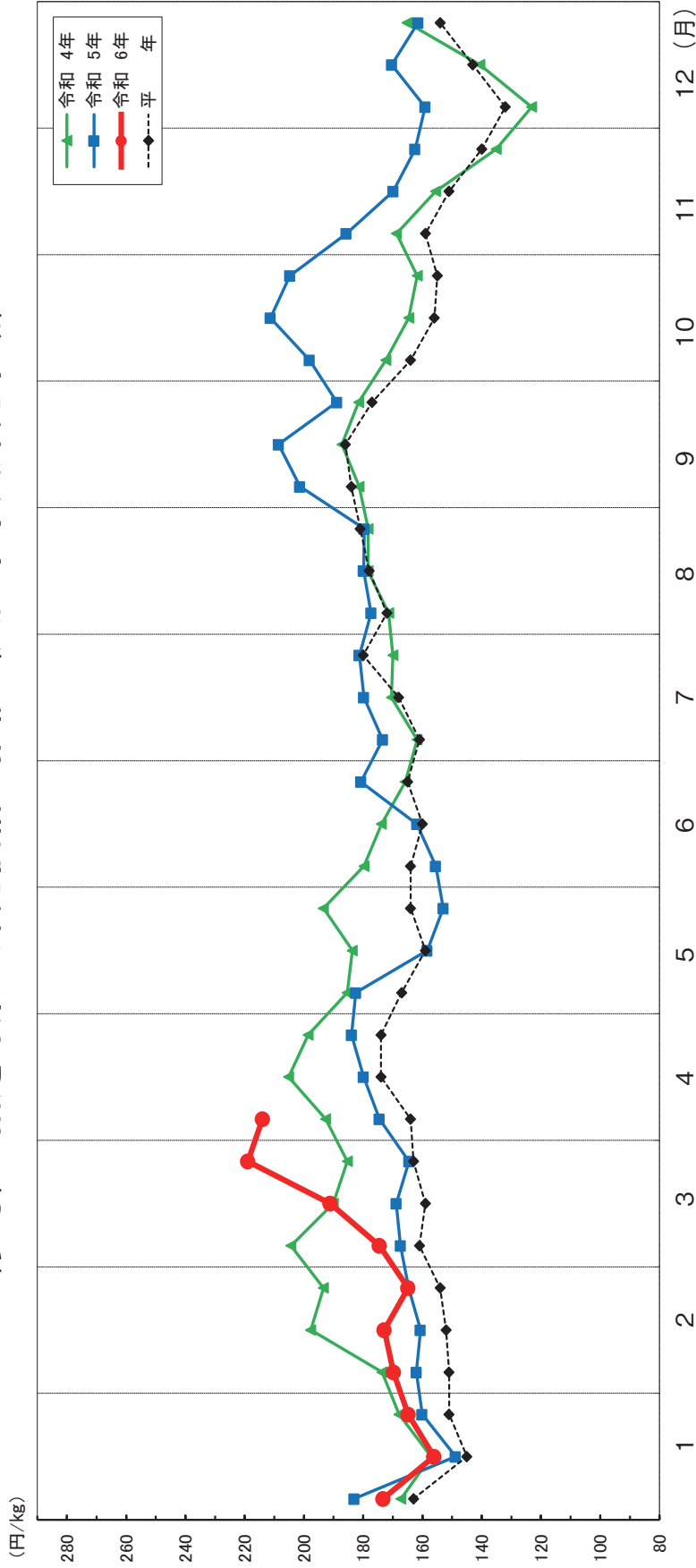
メロンは、茨城産の前年は5月13日頃から始まったが、今年は例年並みに戻り5月20日～25日の間に始まると予想される。市場で評価が高まっていることから作付けが前年より増えている「貴美メロン」のピークは6月の2週目で、7月1週目まで出荷できると予想される。

すいかは、千葉産はハウス物は前年より遅く、5月中旬から始まると予想される。トンネル物は6月中旬からと予想している。ここ数年の出荷は大幅に早くなっていたが、従来の出荷パターンに近い。作付けは前年並みで、品種は「まつりばやし」である。

(執筆者：千葉県立農業大学校

講師 加藤 宏一)

(参考) 指定野菜の卸売価格の推移 (大阪市中央卸売市場)



(単位：円/kg)

	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月														
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬													
令和4年	167	157	168	174	198	193	204	190	185	193	205	199	185	184	193	180	174	166	162	170	170	171	178	178	181	187	182	172	165	162	169	156	135	123	141	165	
令和5年	183	149	160	162	161	165	167	169	165	174	180	184	182	158	153	155	162	181	173	180	181	177	180	180	201	209	189	198	211	205	186	170	162	159	170	161	
令和6年	173	156	165	170	173	165	174	191	219	214																											
平年	178	158	159	163	165	165	168	158	161	156	167	167	158	155	161	160	155	159	157	167	184	175	182	183	183	183	176	164	148	151	157	146	134	128	136	153	

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年とは、過去5力年（令和元年～令和5年）の旬別価格の平均値である。

注2：大阪本場及び大阪東部市場のデータである。